小池辰雄記念図書室だより

2016. 5. 10(火) NO.30

千葉市若葉区都賀 3-24-8-4F 小池辰雄記念図書室発行

小池辰雄博物館

「時機（とき）満ちて 1940 年は秋 9 月
長兄政美の命日を期し
失明の母のための涙の心
聖書伝道の火蓋（ひぶた）を切った。
この弔合戦（とむらいがっせん）は
聖名（みな）のため、いつの日か
仆（たお）れるまで貫かんのみ」

『霊界の星々』－神の幕屋人物詩伝－の「聖書伝道五十年の峠にて」という詩の中に、辰雄が遺している。

1940（昭和 15）年 9 月 22 日、武蔵野村の東にあった自宅の一角で彼は聖書伝道のための小さな集いを始めたのだった。

その時辰雄は、毎週日曜日の集会にはこの袴を着用した。

平常の来会者は 2～30 人の老若男女。聖書講筵は創世記第一章「神天地を創造し給えり」から黙示録第 22 章再臨の「主イエスよ来たり給え」に向かって、ただただ聖書に即して語った。

写真のデスマスクは、1996 年 8 月 29 日に召天した辰雄を、次女歌子のつれあいが残してくれたもの。当図書室では、小池辰雄が愛した書物のほかに、こうした実物にも触れることができるので、「博物館」と呼ぶ人もいる。

発売予告

小池辰雄・水谷幹夫
往復書簡集

小池家と水谷家に保管されていた、
小池辰雄先生と水谷幹夫先生の
間で交わされた往復書簡を
刊行予定です！

小池辰雄を読む会

●余　市
2016 年 5 月 1 日（日）13：30～15：00
2016 年 6 月 5 日（日）13：30～15：00
余市郡余市町豊丘町 370-9 惠泉祈りの家
＊会費:無料(自由献金)
＊連絡先:0135-23-9222(木下)

●札　幌
2016 年 6 月 4 日（土）13：30～16：00
札幌市南区川沿 10 条 3-10-5 札幌祈りの家
＊会費:無料(自由献金)
＊連絡先:011-571-2348(浅井)

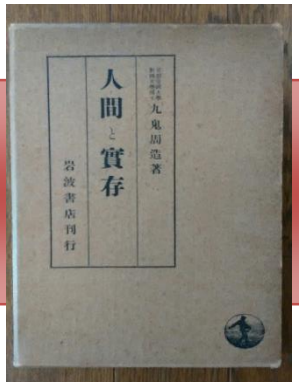
●都　賀
2016 年 5 月 21 日（土）10：00～12：00
2016 年 6 月 25 日（土）10：00～12：00
千葉市若葉区都賀 3-24-8 都賀ﾌﾟﾗｻﾞ 5 階
＊会費:1000 円
＊連絡先:043-235-3815(石丸)
＊準備のため、出席のご連絡をお願いします。
＊予習不要･初心者歓迎

●関　西
2016 年 6 月 19 日（日）13：30～15：30
神戸市中央区磯上通り 4-1-12 神戸ﾊﾞｲﾌﾞﾙﾊｳｽ
＊会費:500 円(自由献金あり)
＊連絡先:090-4645-7389(後地)

本図書室は献金で運営されています
図書室便りは隔月発行です

小池辰雄伝

その 30



小池信雄
（小池牧子と交互に執筆します）

実存主義者

前回の冒頭に、「その実存をもて」という引用があり、小池辰雄の文章によく出てくる「実存」という言葉に、ふと戦後の流行思想「実存主義」のことを考えた。

辰雄はドイツ文学が専門であったし、熱心なクリスチャンでもあったから、戦後の流行風俗、とくにフランス風の風俗にはまったく関心がなかったと思う。したがって、昭和二六年当時、巷で話題になっていたフランス発「実存主義」についてはほとんど知らなかったと思う。

第二次世界大戦が終わった年に、ジャン・ポール・サルトルがパリで行った講演「実存主義はヒューマニズムである」が評判を呼んで広がった実存主義は、戦後の一つの風俗のような現象となった。今で言う「ロックンロールだぜ」といったロック風俗のような、若者の突っ張った生き方を表していた。それがやがて日本にも伝播して、昭和二六年には、アルベール・カミュの『異邦人』（窪田啓作訳）が新潮文庫で刊行され、「きょう、ママンが死んだ」という書き出しの一行から、主人公ムルソウが犯す殺人の動機として「太陽が眩しかったから」という、まったく当時の常識を逆なでするような訳の分からない動機を提示、「不条理」という流行語が読書界の話題をさらっていた。そんなことを、辰雄はまったく知らなかっただろう。

藤井武選集の仕事を一緒にしていた矢内原忠雄の長男、矢内原伊作が、フランスの前衛彫刻家ジャコメッティと親交をもち、その妻と深い関係にあったという彼の生き方は、サルトルやカミュの実存主義に傾倒したところからきている。伊作は、カミュの『シジフォスの神話』（昭和二九年刊）を翻訳紹介するとともに、実存主義の哲学的紹介者として活躍していた。

しかし、伊作の父・矢内原忠雄は、聖書からイサクという名をとったわが子が実存主義にかぶれていることを苦々しく思っていただろうことは容易に想像できる。矢内原は「実存主義などといういかがわしい思想にかぶれて！」と怒っていたと思われるし、そんな時、辰雄が昭和二六年に刊行した『曠野の愛』第二号の12ページにわたる【注】には、神ヤーウェーを「実存主」と訳しているから、小池もまた「こまったものだ」と不快に思ったことだろう。

矢内原をはじめとする無教会の人々が「清瀬事件」（一九五二年）を境に離れていったのはそのとおりだが、そこには実は「実存主義者」のように受け止められてしまった辰雄の「実存哲学」的傾向があったのだと、今回思った。

ヤーウェーを「実存主」と訳し、やがては、「我は有りて在るものなり」（出エジプト３・１４）を、「我は有りて在らしむるものなり」と訳し直すことになるが、この考え方そのものは、サルトルたちのフランス実存主義よりはるかに以前の「実存哲学」からきている。

この連載の初めの方に、私が誕生した時に父・辰雄が購入した九鬼周造の『人間と実存』に触れている。この本だけでなく九鬼周造の著作はほとんど「小池辰雄記念図書室」にはなく、私の手元においてある。今回、小池辰雄の「無の神学」と九鬼周造の哲学とが深く関係していることに思い至り、なるべく早い時期に「記念図書室」に、辰雄の購入していた九鬼周造の著作をすべて移送したいと思う。

サルトルは主著『存在と無』で世界的に有名な哲学者となったが、この著書のテーマ、「無を根拠として在る」問題は、すでに九鬼周造が『人間と実存』で提起しているものだと改めてこの本を読み直して発見した。九鬼は、昭和初年パリに滞在中、まだ学生だったサルトルをフランス語の家庭教師として雇い、その代わり、サルトルにフッサールの現象学、ハイデッガーの実存哲学を教えたと言われている。

とすると、サルトルの『存在と無』は、ひょっとすると九鬼の講義がヒントになっていた可能性があり、サルトルとはまったく関係のないところで、小池辰雄の『無の神学』『無者キリスト』になっていったのではないか。昭和14年に刊行された『人間と実存』を読むとそう思えてくる。